由ヶ丘の四地区があり、これらの地区の北海道電力株式会社への移管実現に努めた結果、四三年度に北落合地区が、一般供給切替えの対象地区として採択され、また、道費単独の補助対象事業として認可され、四二年から改修工事を進め、四三年一月三一日竣工、北電富良野営業所の検収を終え、二月八日に北電の一般供給に切り替えられた。

内藤・共栄、浅野牧場、金山自由ヶ丘の三地区は、四三年一二月一六日に北電が外線の検査を施行、四四年二月三日には内線の検査を実施し、その後、この三地区は北電移管となった。

第六節　町指定文化財

南富良野町指定無形文化財幾寅獅子舞　郷土民芸の幾寅獅子舞は、明治三六年（一九〇三）二月に、恵光寺住職の寺本恵観を中心とする同寺女人講の同志によって発起結成をみた。

獅子舞は、結成以来、南富良野神社祭典に参加、あるいは上川管内郷土芸能会等にも出演し、昭和四〇年には南富良野町無形文化財に指定され、同四七年の第一回かなやま湖水まつり開催以降は、この祭典にも出演し、四九年には北海道芸術祭民俗芸能祭（釧路会場）に公開公演した。

五八年一一月三日には、幾寅獅子舞発起八十周年記念式を挙行、逐年幅広い分野で活動を展開している。

この活動には、幾寅獅子舞保存会を中心に、小、中、高等学校を始め関係機関団体、有志の支援と協力があり、その継承と

幾寅獅子舞発起80周年記念（昭和58年）

保存に力が注がれており、開拓の昔から現代に至るまで、いかなる世の変動に遭遇しても、年々歳々、獅子舞を継承してその懈怠（けたい）することを許さなかったところに、先人の命脈が生々しく躍動している事実を知ることができる。

幾寅獅子舞は、富山県のいわゆる越中獅子を源流とするもので、その発祥、由来などについて「幾寅獅子舞保存会資料」には、次の記述がある。

富山県の、いわゆる越中獅子は、天正十一年（一五八三）加賀の藩祖前田利家公が金沢城へ入府の砌り獅子舞を演じて祝ったのが元祖で、次第にこの地方に普及され、町人文化の発展と共にそれから約三十年後越中地方に伝わったものといわれる。

越中地方に於ける神社の系統には、伊勢神宮系と八幡神宮系とがあり、前者は女性的神後者は男性的神といわれ、その区分に従って之に奉納する獅子の踊り姿も変っている。

即ち伊勢神宮系は派手な衣裳を着て踊りも女性的であり之を獅子舞と名付けられ、八幡神宮系は武力によって獅子を取るという踊りで之を獅子取と名付けられている。

なお、富山県下の獅子舞について『日本の民俗・富山』（太田栄太郎著）は、次のように解説している。

獅子舞　呉西（富山県呉羽山及び婦負郡以東を呉東といい。その反対という説もある）の方には四、五人のものもあり、氷見市の仏王寺から西砺波郡福光町や東砺波郡城端町の方にかけては、一二、三人も入る俗にいうドラシシ（獅子）とかムカデシシ（百足獅子）というのもあるが、呉東では二人獅子が多い。下新川郡朝日町笹川には一人獅子もある。（略）どこの県もそうであろうが、獅子によって悪魔を退治しようというような所作のものと、獅子それ自体を悪魔と見たててその獅子を退治するというもの、大別して二種あるように思われる。したがって獅子の踊り子シシウチ（獅子打ち）とか、シシコロシというところが県下によくある。これに対し中新川郡立山町寺田の獅子のように幌のなかにたくさん人が入っているのは、獅子の威力によって、悪魔を追い払うもののようにうかがわれる稲熱病送りなどの所作をする砺波地方には、概してこうして、見るからに大きな威力のある獅子という感じが強い。（略）

明治三四年（一九〇一）は、旭川～落合間の官設鉄道十勝線が開通した年であり、翌三五年（一九〇二）は幾寅駅が開業、鉄道の伸長は、十勝国、胆振や日高国への集団移民乃至は単独移民を累増させた。本村にも岐阜、伊勢の団体移民や内藤、浅野、松井農場への小作の移住、あるいは森本京蔵、定塚孫エ門らの入地により、殖民地区画の特定地には小規模ながら集落の形成をみ、真宗大谷派説教所（恵光寺前身）が開設され、周辺農民は、千古斧鉞を知らない大樹の伐採と身を覆う雑草刈などに苦難の日々が続いた。しかし、この苦闘の生活を克服し、初志を貫徹するには、まず住民自身の固い結束が必要であった。住民の精神生活を豊かにし、慰めを与え、人心を勇気づけ、心の拠り所となるものは神仏への祈りであり、これに合わせて、古来故郷に伝承されている越

中獅子舞をこの幾寅の地に再現しようとした素朴な人々の願望が幾寅獅子舞の発起結成をみたのである。

開拓民らの農耕その他生産にまつわる祈禱と感謝とを内容とする信仰が、家族中心から更に部落を中心とした広がりをみせ、民衆的な行事である獅子舞へと展開したところに特色があり、寺院を舞台に、特に女人講中から結成された事実は、「幾寅のお寺の獅子」という特質を物語っている。

恵光寺の古文書の記録によると「獅子責任管理ハオ寺様トス、世話人定塚音吉、女人講代表森井ほの、神長夫人、浅野夫人。借リル時ハ許可ヲ得ベシ又ハ発起世話人ト相談シテ借リルベシ。発起者又ハ世話人ト協議ノ上謝礼スベシ。品物ナクシタルトキハ弁償スベシ」以上の様な定めによって運営された。

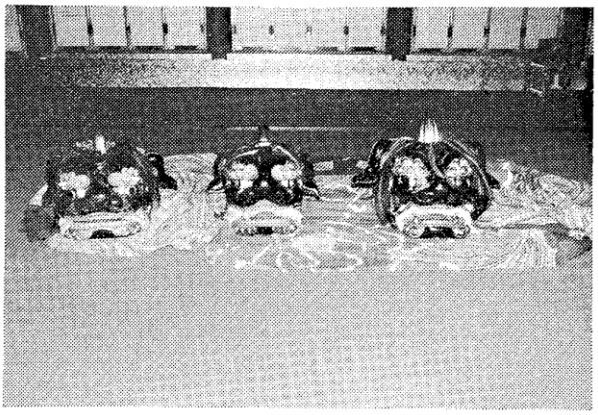
「明治三十九年正月、オ寺様ヘ落合新山入獅子頭貸御礼山組代表川戸長松、一金十円酒三升、スルメ二ヶ、米二升」と言う記録もあって、その頃の人情と風習がよく判る。又「幾寅新山入獅子頭貸御礼、山子代表森井庄吉一金十円、酒一升、肴、山鳥三羽」ともあって、木材の村の杣夫が百獣の王の獅子によって山の魔を除けようとした事が判る。（略）「幾寅獅子舞保存会資料」と記され、民衆の獅子舞として愛され、活躍した跡が偲ばれる。

幾寅獅子の踊りの種類（『前掲資料』）。

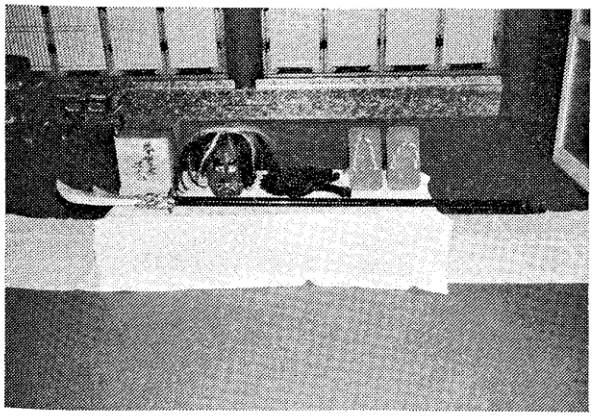
七五三（しちごさん）

神楽の太鼓の打ち方から発生し、これを踊りに表現したもので、太鼓の打ち方は手が混んでいる。

吉作（よっさく）



幾寅獅子舞獅子頭等（恵光寺蔵）



同天狗の装具一式（恵光寺蔵）

又は四つ作、吉崎ともいわれる様である。四季を通じて農作物が豊作で併せて家運繁栄であることを祈るものである。

狂振（きょうぶり）

京振とも書き能の狂言から作り出されたもので、獅子の首の振り方は妙味がある難かしい踊りである。

剣ばやし（けんばやし）

又は玄林ぎおんばやしともいゝ、剣を持って囃しに合わせてテンポの早い勇壮活発な踊りである。

八つ節（やつぶし）

笛の八つの音色の特異な変化を踊りに表わしたものである。

天狗（てんぐ）　獅子殺（ししころし）　いそぶり（いそぶり）　にらみ（にらみ）

幾寅獅子の編成と姿態（「前掲資料」）

幾寅獅子はその規模と編成において古来より伝承さ

れて来たものを、そのまま保存されているもので、次のような人数と役割によって構成されている。

獅子（かやの中に入る者）
（この内獅子頭一人、胴の中役六人、尾一人計八人）
獅子取　三人　太鼓役　二人　鐘役　一人　笛役　三人　天狗　一人　計一八人

以上で編成されているが、獅子の胴体に入る八人は疲労が激しいので交代として別に八人を必要とする。

獅子の全長は、六メートル五〇で、浅黄色に牡丹の花模様の入った本麻布地を用いて飾られており、獅子頭は黒漆塗桐材で重量八瓩、獅子の尾は一メートル三〇で本麻を赤く染めて用いている。

昭和五六年、幾寅獅子舞保存会長坂井仙之助が死去、役員改選により森井義雄が会長に就任、副会長に西脇政常、大沼俊夫、実行委員長は加藤聡、指導部長は森井俊行、副指導部長には曲木晃一、加藤新太郎、監査役は高橋萬、伊賀正、世話部は北村治作、一条秀雄、事務局は大野一郎がそれぞれ担当し、現在に至っている。